

相棒 あなたの



人間誰も、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第13回目は、岡でサドル専門メーカー「加島サドル製作所」を営む加島英二郎さんです。

※今回掲載しきれなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。

尽きることのない思い

今回訪れたのは、昭和11年創業、国内で唯一のサドル専門メーカー「加島サドル製作所」。現社長の英二郎さんが三代目となる老舗だ。競輪からママチャリ、子供用のサドルまで幅広く製作している。かつて日本にもサドルを作る会社がたくさん

あった頃は、価格競争が激しく、経営も厳しかったらしい。そんなとき、先代社長がコスト削減のためい

く中国に目を向けて会社を進出させ、そのおかげで生き残ることができたそう。

この仕事をする前は建築関係の仕事をしていたという英二郎さんだが、先代社長だった父親を助けるために

跡を継いだと教えてくれた。

取材中、サドルに革を貼り付ける

作業を見学させていただいた。「ちょっとでもシワになったら終わりやから・・・ちよつと緊張するなあ」と照れながらも、見事な手さばきで美しく革が貼られていく。ママチャリ

用などは、別の所で量産するそうだが、競輪用や自転車愛好家向けの高

級サドルは全て手作業だと言う。「安物は目に見えへんところで手を抜いてるけど、表から見えへんところまできっちり仕上げるのが大事」という言葉に職人気質を感じた。「最初の頃は、手が痛くなったり、水ぶくれができたりしたんやけど、続けているうちにだんだん手の皮が分厚くなってくる。せやけど10日ほど出張に行ったら、その間に手が元に戻ってしもて、また水ぶくれができた」と笑っていた。

修業期間はあったのですかと尋ねると、「今でも日々修業!」と即答されたのがとても印象的だった。「お客さんからどんな依頼がきてても、とりあえず話を聞いて、できる限りのことをする。難しい注文をどうこなすか。難しいことをすればするだけだ。どんなスキルが上がって楽しいし、完成したときの喜びも大きい。その上でお客さんに喜んでもらえたらすごく嬉しい。」とおっしゃっていた。

「相棒」はいつも使っている「ペロンチ」。ずっと関わってきた「自転車」にしようかと一瞬迷われた。社長業をしながらも、物作りの心を大切にしたいという気持ちの表れをそこに垣間見た気がした。

文 松本穂絵(二年)

